

# 学長インタビュー

麻布大学  
まさおかとしお 政岡俊夫 学長

## 生態系と人間社会の接点で 活躍する人材を養成する

麻布大学は、明治二十三年（一八九〇）開設された「東京獣医講習所」を創基とし、昭和二十五年（一九五〇）麻布獣医科大学開学、昭和五十三年（一九七八）四月の獣医学教育年限延長の第一次発足や環境保健学部現、生命・環境科学部開設を機に大学名を麻布大学に変更されました。  
今回のインタビューは、一二〇年近い歴史の中で果たしてこられた役割と、将来構想・使命を中心にお話を伺います。

### 高度専門職業人の養成を目指す

麻布大学の将来構想と使命についてお伺いします。

**学長** 本学はおよそ一二〇年の歴史があるわけですが、明治の頃の本学の前身である「東京獣医講習所」は、欧米の新しい畜産学や獣医学をわが国に導入するという時の政府の方針に呼応した、獣医師の養成を目的としていました。

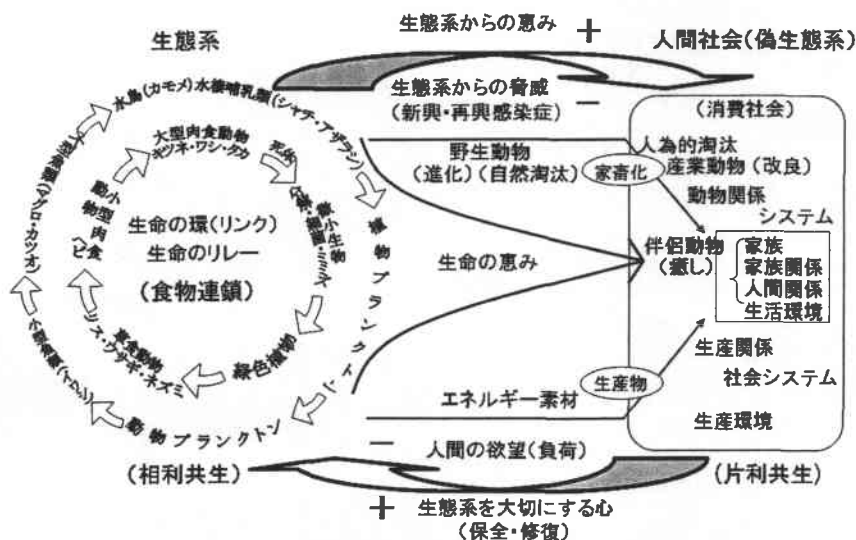
創設者の與倉東隆は、獣医学教育が単なる学問としての探求に終わることなく、それを即戦力として実社会に役立てる実学としての重要性を唱えて人材育成に努めました。「学理の討究と誠実なる実践」という教育理念は

現在にまで受け継がれて、実学重視の教育が行われています。

つまり、本学では脈々と実学重視の教育が行われてきたわけですが、平成十三年に大学基準協会の相互評価（現、認証評価）を受けるとともに、その際、本学の教育理念や教育目標、あるいは建学の精神を改めて確認しました。

また、文部科学省が示した大学の機能別分化の七項でいえば、本学は「高度専門職業人養成」と「幅広い職業人養成」に位置しているわけです。そして、どこを目指すのかといえばやはり高度専門職業人の養成です。

生態系の摂理と人間社会





政岡 俊夫 学長

昭和23年7月 高知県生まれ  
 昭和46年3月 麻布獣医科大学獣医学部獣医学科卒業（獣医学士）  
 昭和46年4月 麻布獣医科大学（現、麻布大学）助手  
 平成6年10月 麻布大学教授に昇任  
 平成7年4月 麻布大学獣医学部動物応用科学科主任（平成10年3月まで）  
 平成10年4月 麻布大学獣医学部長（平成14年3月まで）  
 平成14年6月 麻布大学長に就任（現在に至る）  
 専門分野 獣医薬理学・比較毒性学  
 審議会等 薬事・食品衛生審議会臨時委員（日本薬局方部会員、動物用医薬品等部会員、動物用抗菌性物質製剤調査会調査員および動物用医薬品残留問題調査会調査員）農林水産省動物医薬品検査所プロジェクト研究評価委員会委員長など歴任  
 著書 健康と元素 -その基礎知識-（南山堂）  
 KIRKS 小動物今日の治療指針 第3章中毒症（興仁舎）など

高度専門職業人の養成は、学部教育だけでは十分ではありません。大学院博士前期課程を利用した教育をこれからますます充実させていかねばなりません。学部と博士前期課程を一体化させたコースをつくらうと考えているところです。

本学は、獣医師の養成、人の健康に関わる臨床検査技師の養成、それに加え新しい分野ですが、人と動物との共生及び環境教育。この四つが柱になります。そういうことが平成十三年にはっきりと固まりましたので、その展開に取り組んで七年が経ちました。

私は平成十四年の六月に学長に就任しました。

就任してすぐに「地球共生系 人と動物と環境の共生を目指して」という本学の一つの目標を掲げました。それを概念図で表したものが図の「生態系の摂理と人間社会」です。生態系では何が起こっていて、人間社会との接点で何が起きているのかということをはっきり

## 動物を介して人の健康を守る

りにして、本学ではそれに対応できる人材育成を考えています。

——獣医師の果たしてきた役割と果たすべき役割についてお伺いします。

学長 獣医師の仕事から見ていきますと、一つは動物性食糧の生産、それから公衆衛生の分野で人の健康を守るという大きな二つの役割があります。いずれも動物を介して人の健康を守るといふ仕事に携わっていますが、公衆衛生分野、小動物臨床分野、野生動物分野、農林水産分野、バイオメディカル分野、国際協力など、その役割は多様性に富んでいます。「生態系の摂理と人間社会」の図にあるような、人間社会と生態系との接点で生じる問題に取り組むのが獣医学であり、取り組めるのが獣医師であると考えています。とくに、新たな疾病の約七五％がいわゆる

動物由来の感染症に起因すると言われていて、新興・再興感染症に如何に対処するかというのが獣医師のグローバルな仕事ということになります。

しかし、問題もあります。今の段階では、獣医師ライセンスはグローバルには通用していません。獣医師の仕事には食の安心・安全にかかわる検査があります。多くの動物性食品について輸出入の際にその安全を保証しているのはそれぞれの国の獣医師ですから、それぞれの国の獣医師の保証を相互に認めることができるかという問題があります。ライセンスを相互承認していない限り、お互いに認め合うことができません。また、国際的な分野で獣医師が協調して、新興・再興感染症をどう制御するのかという上からもこの問題は重要なのです。

そこでパリにある獣医師の国際的な機関である国際獣疫事務局が、獣医師の教育について今年の十月に世界獣医学部長会議を開く予定です。獣医師教育をグローバルな基準で見えていくことが課題です。

この問題への取り組みは実は一三年前にはじまっています。平成七年に横浜で第二回世界獣医学大会が開かれまして、その時にも世界獣医学部長会議がありました。その際に獣医学の分野で教える科目として最低基準の

二四科目を決めました。これが世界的に行き渡るのに一〇年から一五年ぐらいかかるだろうという中で、一三年目を迎えたわけです。去年の七月にカナダで行われた第二九回世界獣医学大会でもその話がありました。

## 卒業後の勉強をサポートする

— 獣医師の仕事についてお伺いしましたが、専門的な技術ですから、リカレント教育のシステムが必要になってくるのではないのでしょうか。

学長 ええ。もともと技術者というのは、卒業して仕事についてから本当の勉強がはじまります。

ですから、われわれ教員の責務は学生が卒業してから勉強に取り組める基礎能力を養うことだと思っています。それが大学や高等教育機関の本来の姿だと思います。もちろん、現役で働いている人たちからすると、専門的な部分の教育が足りないという声もあるのですが、六年間の教育の中で今世間が求めているような専門的な内容を教えるのは無理なのですね。それは皆さんわかっています。そこで、卒業教育を充実させるのもわれわれの使命と考えております。

— 食の問題や健康に関わることを扱っていますから、社会から獣医師への期待はこれからはますます大きくなっていくでしょうね。

学長 そう思います。とくに食の安心・安全については、BSE騒動の時に一部崩壊がはじまって、その後の毒物混入等の犯罪によっ

て完全に崩壊してしまいました。その部分についてはわれわれにはどうしようもありませんけれども、技術的に食の安心・安全をどう

## 研究は教育のツール

— 麻布大学の特色ある教育・研究についてお伺いします。

学長 中央教育審議会の答申などから、これからの大学教育において何が大事なかが明らかになってきました。例えば、初年次教育や導入教育の重要性が言われていますが、本学でも教育推進センターを平成十九年に開設しました。

このセンターは学生の教育支援と教員の教育支援という二つの目的を持っていますけれども、開設したばかりということもあって、どちらかというと学生の教育支援が中心になっています。最初に取り組んだのがプレースメントテストですが、これにより各学科に入学した学生の能力がはっきりわかるようになりました。この学生をいかに出口に導くかが教育推進センターの一つの役割です。このセンターを使ってリメディアル教育をはじめ様々な取り組みを仕掛けていこうと考えています。

研究については、研究推進支援本部を平成二十年四月に開設しました。活動自体は平成十九年度から行っています。教員の基本は研究ではなくて教育にあり、研究は教育のツールであると伝えてあります。しかし、逆に、大学の教員である以上は、研究をしないなら

担保するかということについては、獣医師をはじめとする食料生産にかかわっている者の務めだろうと思っています。

ば教壇に立つてもらっては困るとも言っています。ですから、教員の研究支援のために積極的な情報収集を行い、外部の研究資金獲得のための紹介なども行っています。知財の活用などもここでを行っています。

また、ここでは「研究マップ」をつくっています。研究マップによって、教員がお互いになんか研究をしているかがわかるようになります。将来的な方向としては、個人の研究よりも共同研究を充実させていきたいと考えています。やはり共同研究によって、研究の効果を上げていく必要があります。そのために、本学がどういふ研究をしているのかを外部にPRしていこうと考えています。

本学は、生物科学総合研究所を昭和六十三年に設立していますが、そこで共同研究を組んでいたおかげです。ここでは、既に本学の特色を生かした大きなプロジェクトがいくつか走っています。たとえば、一〇年ぐらい前からダイオキシン類の生体への影響を研究しています。それから、人間に有益な細菌である乳酸菌の研究。そして、新興・再興感染症の研究では、日本の生態系に影響を及ぼしそうな感染症であるカエルツボカビ病やナラウイルスの研究も行っています。

## ディプロマポリシーを 明確にする

——「麻布スタンダード」についてお伺いします。

**学長** これについては、アドミッション、カリキュラム及びディプロマについて各学科でどういうポリシーを持っているのかを明示してもらおうことから進めています。平成十九年に動物応用科学科を改組しましたが、そこで三つについてポリシーをつくってもらいました。それをモデルに他の学科も早急にできるようにお願いしているところです。それができた段階で、「麻布スタンダード」というものをつくりたいと考えています。

つまり、大学全体としてのコアカリキュラムは何なのかを明示します。それは本学の理念を表すコアカリキュラムですが、初年次教育や、かつての教養教育のようなものも含めて、学生が「何を身につけるのか」「何ができるようになるか」ということを打ち出します。

それから、各専門分野のコアカリキュラムをつくります。専門分野のコアカリキュラムをつくることによって、自分たちがどういうディプロマを出すのかというのがはっきりしてくると思います。本学でそれがはっきりしているのは獣医師を養成する獣医学科と、臨床検査技師を養成する臨床検査技術学科です。すなわち二つの学科はライセンス教育ですから。

ところが、他の学科の場合は学科の名称か

らは、どういうディプロマを出しているのかが見えにくいのです。今まで日本では、本学もそうですが、学部学科にいろいろな新しい名前を付けるのが流行りました。例えば、本学独自の動物応用科学科という名称がありますが、「動物応用」というのは広すぎるんですね。ですから動物応用科学科の中に二つのコースをつくって、コース制で教育を行います。コアカリキュラムをつくり、コース制で教育を行うことで教育の目的や分野がはっきりしてきて、どういうディプロマを出すのかも明確になると考えています。

## 第一段階として授業評価の事例を共有する

——FDの取り組みについてお伺いします。

**学長** FDを大上段にかざすと教員も何がFDかということをそれぞれ考え出します。そしてFDには様々な方法論がありますから、なかなか議論がまとまりません。そこでまず学生による授業評価に取り組みました。今年で四年目になります。

授業評価の一部はオープンにせず、それぞれの教員に戻しています。その代わり教員は義務として、昨年の評価を踏まえた今年の教育方針を学生に示した上で、教育をはじめます。

評価の悪かった教員も、そこで反省するばかりではなく、学生に対して教育における自身の信念を示してもいい、としています。

その中からオープンにしたいという教員の事例を公表して、教員や学生がどんな風に変わってきているのかを皆で共有しています。これはFDの第一段階であると受け止めています。今後の取り組みを検討しているところです。

——附属高校をお持ちですが、高大連携についてお伺いします。

**学長** 本学の場合、高大連携というよりも高大一貫教育として捉えています。附属高等学校は、毎年二八〇人ぐらいの卒業生を出していますが、その中で本学に進学希望している生徒に対して、高校の段階でどのような教育を提供できるのかを三年くらいかけて検討してきました。

第一段階としては、やはり大学に興味を持ってもらうということ。あるいは本学が何をやっていのかを高校生にわかってもらうことです。

その次に高校で得た単位を大学につなげたいと思っています。昨年から年間二単位くらい、それぞれの学部の特徴を生かした授業を提供しています。

## 地域ぐるみで教育を行う

——先ほど食の安心・安全の話が出ましたが、職業人倫理や教養教育の取り組みについてお

伺います。

**学長** 倫理というものは、やはり大学の中

だけでは教育できないと考えています。そこで、地域の力を借りています。本学には、毎年各県から学生が集まります。そうすると、昔でいうと下宿、今で言うところアパートを借りて大学の周辺に住むことになりました。日々の生活の中で学生は地域の方々と接触しますので、商店街の方々に学生をよく見ていただくようにお願いしています。

学生は高校生の頃とは異なって、地域の人から社会人として認めてもらえます。そうすると社会的なつきあいができるわけです。若い多感な時期を過ごすわけですから、地域の人からいろいろな影響を受けて、卒業してからもここが第二の故郷になります。私もそうですが、生まれ育った町が第一の故郷だとすれば、大学時代に過ごした町は第二の故郷と言ってもいいですね。ですから、地域の方々には、学生はここが第二の故郷になりますからよろしくお願いしますと言って地域ぐるみの教育をお願いしています。

大学としても地域にどう貢献できるかというところで、今から五年ぐらい前になりますが、この地域の商店街と大学が一緒になって、地域の活性化、商店街の活性化に取り組もうという話をしました。その際に、地域の方は大学の知恵というよりも、学生の知恵を借りたということおっしゃるんですね(笑)。今、学生が地域のお祭りを手伝ったりしていますが、大学祭の時には地域の商店街のブースも出してもらっています。

それから市と共同で、地域の美観運動として、環境問題を考えるためのイベントを大学

で開催していますし、あるいは神奈川県養豚協会と一緒に「かながわトントンまつり」を開催したりしています。

## 将来を狭く捉えないでほしい

——学生支援について伺います。キャリア教育やキャリア支援の取り組みはいかがですか。

学長 キャリア教育としては、就職課を中心に専門家の意見を聞きながら、支援を行っています。また、卒業生に来ていただいて話をしてもらうなどの取り組みを行っています。

私が学生に常に言っているのは、四年間あるいは六年間で学んだことが、将来自分の専門になる、あるいは自分の職業になるというような狭い捉え方はしないで欲しいということです。

獣医学科及び臨床検査技術学科はライセンス教育ですから、はっきり進路が見えているわけですが、他の学科については、その四年間で学んだものが、そのまま進路につながるとはかぎらない。極端な話、専門的な分野を学んだうえで、小説家になってもいいわけです。ただし、そうは言っても大多数の学生は自分の学んだ分野を中心に社会を見ていますので、外からの専門家の意見を聞きながら、学生が自分の将来を選択できるような体制をとっています。

——メンタルヘルスの相談体制はいかがですか。

学長 メンタルヘルスについては、本学では健康管理センターで対応しています。本学

には生命・環境科学部に教員として医師が二人いますので、彼らにお願いすると同時に、週三回二人の専門家に来てもらうという体制をとっています。実は学生の予約でいっぱいという状況です。もう少しこの部分を充実させる必要があると考えています。

学生からは様々な問題が持ち込まれていて、人生相談から、そこに持ち込まなくていいような勉学の悩みまでありますが、教育推進センターができましたので、勉強の悩みについては徐々に教育推進センターの方にシフトして行くようです。

——優秀な学生を集める方策について伺います。

学長 エンロールメント・マネジメントとすることが以前から言われていますが、やはり、われわれ私学としては卒業生が財産です。本学は、幸いなことに獣医学科を中心に同窓意識が強いということがありまして、各都道府県に同窓会支部が作られ、結構活発に活動されておりますので、この支部を介して優秀な生徒さんに本学を勧めて下さるようお願いしています。

## 留学生の普段のケアが難しい

——国際交流について伺います。

学長 ペンシルヴァニア大学と学術交流協定を結んで一〇年くらいになります。学生が毎年二週間程度、ペンシルヴァニア大学に短期留学しています。希望者のみですから二〇人足らずです。

ここ数年、獣医学部を中心として、アジアの各大学との間で学術交流協定を盛んに結んでいます。台湾の中興大学、中国の北京農業大学及び吉林農業大学、韓国の全北大学、タイのチェンマイ大学ですが、大学院生や若手の研究者をそれぞれ四人ずつ、獣医学技術習得のための一カ月間の短期研修生として受け入れています。同時には無理ですから時期をずらして受け入れています。

小さな大学では留学生の受け入れには難しい面があります。教育は問題ないのですが、普段のケアが難しいのです。どこかでまとめて受け入れていただいて、一部を引き受けるというのであれば可能かもしれません。

かつて日本獣医師会がアジアの獣医師の養成ということで、JRA(日本中央競馬会)の補助金で毎年四〇人ほど留学生を受け入れて、ケアは日本獣医師会が行い、教育は各大学に割り振るという形で留学生の受け入れを行っていました。その時には、われわれも教育の提供をしたのですが、そういう形であれば、本学のような小さな大学もお手伝いできます。

## 早急にSDに取り組む

学長のリーダーシップ、ガバナンスについて先生のお考えをお伺いします。

学長 本学は私立大学ですが、その成り立ちから経営者がいません。本学の法人構成である卒業生と学内職員がお互いに役員を出して大学運営をしています。しかし、卒業生は兼職になりますので、やはり実質的には学内

の教職員で運営することになります。ですから、本学は伝統的に教員が運営している大学であると言えます。

そこで問題になるのは、私学法に照らし合わせてきちんと運営できる体勢になっているのかどうかということです。教員の本来の仕事は教育研究ですから、運営が片手間になりかねません。事務組織が強固にならないと大学運営は難しい時代になっていると思います。

## 食育から環境教育まで「いのちの大切さ」を伝える

——昨今、様々な問題が指摘されていますが、青少年の教育の座標軸について先生のお考えを伺います。

学長 われわれが青少年に何を伝えるのかを考えるならば、やはり動物を介して「いのちって何だろう」あるいは「いのちの大切さ」を伝えることではないかと思っています。

食育教育などが盛んに言われていますが、今の日本の教育では、食べることが生物のいのちをとることであるということをブラックボックスにしているように思います。宗教的な影響も随分あるとは思いますが、保護者や小中学校の先生方も、そういうところはなるべく触れたくないということもあると思います。

毎日の食卓の上に載っている物の一つ一つに命があったということは、もう一度きちんと発信し直す必要があるんじゃないかと思っています。先ほど「生態系の摂理と人間社会」

ですから早急に事務組織の立て直しを行い、事務職員が大学運営の専門家として、教員に意見を提案していく形に変わる必要があります。

今までは事務職員は教員の言いなりになっていればよかったのですが、これからは教員と対等、あるいはそれ以上になっていかなければならないと思っています。そのため道筋をつけることが私の役割ですね。

で示したように、生態系からは生命の恵みが来ているということ、そしてその言葉の裏の現実で何が起きているのかということをもっと少し見せてもいいだろうという考えを私は持っています。

最終的に何をさせるかと言えば屠場ではないかと考えております。一昨年に『いのちの食べかた』という映画が公開されましたが、まさにそこを扱っています。自分たちがどう食べているものを通して、命の循環がどう行われているのか、その命を育んでいる生態系がどうなっているのかというところを発信していく。生態系が崩れたらわれわれは生きていけないわけです。食の問題は環境教育までつながっていると思っています。

ただ、学校現場では宗教の問題などいろいろと難しい問題があるようです。なんとか方法を考えて実現させて欲しいと思います。